「若者の右傾化」論を総括する

平成日本若者論史 11

後藤和智（後藤和智事務所 OffLine）

「若者の右傾化」論を総括する

平成日本若者論史11

著：後藤和智（後藤和智事務所ＯｆｆＬｉｎｅ）

プレ版：２０１４年６月15日（仙台コミケ２１７）
完全版：２０１４年８月17日（コミックマーケット86）

目次

まえがき　3

第１章〈若者文化〉を語るが如く
　思想を語るなかれ　4
　１．１ はじめに　4
　１．２ ２００５年衆院選の「若者論」　6
　１．３「若者の右傾化」論を受け入れる
　「ロスジェネ」論客　8
　１．４「若者の右傾化」論の形成と
　〈若者〉敵視のポリティクス　10
　１．５ おわりに
　――近年の「若者の右傾化」論への批判を交えて　11

第２章〈劣化言説の時代〉における
　若者論客の変容――香山リカを例に　13
　２．１ はじめに　13
　２．２ 分析手法　13
　２．３ 横断的な分析　14
　２．４ コーディングを用いた分析　17

おまけ――若者文化論という病　18
　ＥＸ．１「若者の右傾化」論と現代若者論の位相　18
　ＥＸ．２ オタク論者やマーケティング論者に
　社会を語らせてはいけないこれだけの理由　23

まえがき

４２冊目の同人誌となります、後藤和智です。本書のテーマは「若者の右傾化」論です。２０１２年１２月に自民党が政権に返り咲くと、またぞろ一部の論客の間で「社会の右傾化」というものが言われるようになりました。思えば２００５年の衆議院議員総選挙、所謂「郵政選挙」において小泉純一郎政権時代の自民党が圧勝すると、東京新聞などにおいて〈若者〉によって自民党が支持されたのだ、ということが言われるようになりました。ほぼ同じ時期に、三浦展の『下流社会』（光文社新書、２００５年）が刊行され、若い世代における階層化、そしてそれによる想像力の欠如などが、一部の論客において、〈若者〉によって自分たちに不都合な事態がもたらされているというように認識されるようになりました。

しかし第１章でも述べるとおり、このような認識は、主にバブル期において我が国にもたらされた「一億総中流」意識を基底としており、それが上の世代のアイデンティティとして認識されているため、「右傾化」という事態は自らの世代とは違ったアイデンティティを持った世代、つまり〈若者〉によってもたらされているというというのが、「右傾化」がすなわち〈若者〉によって起こったものであるという認識に繋がっていると言うことができます。そしてそのような議論を推し進めてきたのが、香山リカをはじめとする若者文化論の論客であり、彼らが〈若者〉が「右傾化」の源泉であるという議論を推し進めてきました。

もちろんこのような議論に対する批判もありました。例えば拙著『おまえが若者を語るな！』（角川Ｏｎｅテーマ21、２００８年）で触れたとおり、香山の『ぷちナショナリズム症候群』（中公新書ラクレ、２００２年）が発売されたときに真っ先に批判を加えたのが、左派系スキャンダリズム雑誌『噂の眞相』のコラム「撃」の書き手の一人「鵠」でした（初出は『噂の眞相』２００２年11月号）。

> 日本語ブームや朗読ブームの危うさを取り上げつつ、そこで検証されるべき歴史と目の前の現象とを切り離して屈託なくふるまうのが「ぷちナショナリスト」だと香山は言うのだが、他でもない香山自身の考察がまったく歴史性を欠いているのである。（略）社会的背景を考えるといっても、せいぜい数十年単位の世代論でしかない。（鵠［２００４］p．２４５）

他にも（主に若者文化論者によって担われてきた）「若者の右傾化」論に対する疑念は、鈴木謙介（彼も若者文化論者ではあるのですが）の「若者は「右傾化」しているか――左派の歪んだ映し姿」（『世界』２００５年７月号）など、少なからず疑問が挟まれてきました。とりわけ２０１４年に入って刊行された、樋口直人『日本型排外主義――在特会・外国人参政権・東アジア地政学』（名古屋大学出版会、２０１４年）と、古谷経衡『若者は本当に右傾化しているのか』（アスペクト、２０１４年）は、左右両派から「若者の右傾化」論に対する極めて強烈な批判として読まれるべきものです。

ところが、同じく２０１４年に出た村上裕一『ネトウヨ化する日本』（角川ＥＰＵＢ叢書、２０１４年）をはじめ、今なお若者文化論者などによって「若者の右傾化」論は担われています。そして今なお「右傾化」を論ずる論者は、オタクやニコニコ動画視聴者などの〈若者〉によってそれが担われているという認識を開陳するものが少なくありません。

そしてその背景は、まさに香山などの消費社会の文化を背景とする論客が、さも〈若者文化〉を語るが如く政治や社会を語ることを、語れるという幻想を振る舞うことを続けてきたというものがあります。そのため「若者の右傾化」論を総括するには、主にバブル期以降に育まれてきた、消費社会と〈若者〉論客のあり方を今一度問い直す必要があると考えます。

本書は、第１章において「若者の右傾化」論に繋がる若者文化論及びそれによって担われてきた認識の系譜、第２章では間違いなく「若者の右傾化」論を担ってきた論客の一人である香山リカの時評について、彼女の本来のメインのフィールドである若者論と絡めてテキストマイニングによる分析を試みます。そしておまけには、ここ最近のサークルペーパーなどで書いてきた、「若者の右傾化」論と若者文化論の関係についての論考を再録します。

もちろん「右傾化」と呼ばれる事態が起こっているとするならば――そして実際に排外主義による暴力を我々は目の当たりにしているわけです――それは問題視されなければなりません。しかしその「原因」が、〈若者〉という「自分たちとは違う」と認識されている層に押しつけられ、主観的な「文化論」によってその「原因」が同定されてしまうという事態は、むしろ避けられるべきものではないかと考えます。

ここ20年（！）ほどの議論において、〈若者〉や〈若者文化〉を語るが如く、社会について論ずることができるという幻想を打ち破るという行為こそが、レイシズムの暴力に対抗するために求められているのだと思います。

第1章 〈若者文化〉を語るが如く思想を語るなかれ

1．1 はじめに

本章では、「若者の右傾化」論の形成について、主に2000年代以降の若者論と、1980年代半ば以降のアイデンティティ論、サブカルチャー論の流れを追いつつ見ていくこととする。また、それらの言説の背景にある社会意識とその問題点について、主に貧困研究を参照しつつ見ていくこととしたい。

そもそも現代の「若者の右傾化」論は、1990年代以降における「劣化」言説及び「階層化」言説を背景にしている。まず「劣化」言説とは、1990年代半ば頃から、わが国において日本社会の「劣化」が至る所で論じられるようになったものである。「劣化」言説に関する是永論らの研究によると（是永論ほか［2011］）、書籍や新聞の投書欄において「劣化」が大々的に語られるようになったのは1990年代の終わり頃になるという（表1-1，2）。また同研究における世論調査では、とりわけ教育・青少年分野において「劣化」が認識されている

ことが明らかにされている（表1-3）。

青少年問題における劣化言説の展開は、2000年代に入ると、教育や青少年分野における論客（現職の教員のほか、教育学、心理学など）ばかりではなく、栄養学や建築学、医学などといった分野の専門家によっても出されるようになる。例えば、料理研究科、タレントとして有名な服部幸應の『新食育革命 食がこどもたちを救う』（集英社、1999年）、建築家の横山彰人の『子供をゆがませる間取り』（情報センター出版局、2001年）、歯科医の丸橋賢による『退化する若者たち』（PHP新書、2006年）が挙げられるが、これらは1990年代以降に積極的に論じられるようになった少年犯罪や学力の低下（ただし、これらの問題は極めて誇張した形で語られることが多い。広田照幸『教育言説の歴史社会学』（名古屋大学出版会、2001年）、本田由紀ほか『「ニート」って言うな！』（光文社新書、2006年）、後藤和智『現代学力調査概論』（後藤和智事務所OffLine、2012年）などを参照されたい）について自らの分野に引き寄せて説明したものとなっている。「劣化」言説における家庭・青少年関係への偏重は、例えば2001年に『週刊朝日』（朝日新聞社。現在は朝日新聞出版）において行われた企画「徹底考察 日本人の劣化」の内容が、第4～6回を除いてほとんど家庭・教育・青少年関係であることからも見ることができる。

特に若い世代における「劣化」言説の形成を見ていくと、宮台真司や『宝島30』（宝島社）といった、1990年代半ば以降の若年層向け、あるいは若年層に人気のあった論客・オピニオン誌におけるポジショントークの材料として、それぞれの論客・メディアが思い思いに利用・誇張したという側面が強い（後藤和智『おまえが若者を語るな！』『「あいつらは自分たちとは違う」という病――不毛な「世代論」からの脱却』（角川Oneテーマ21、2008年／日本図書センター、2013年））。特に青少年問題については、宮台のような「社会学」を背景とした論客が、現代の青少年問題を「ポスト近代」における問題として積極的に採り上げたことで、その認識を追認する社会学者や教育社会学者、哲学者もまた現代におけるポストモダンの様相として若い世代の問題を採り上げることが多くなった。

また1990年代終わり～2000年代初頭における、橘木俊詔『日本の経済

表1-1 雑誌記事における「劣化」言説の時期ごとの展開（是永ほか[2011]p.11より作成）

時期	
1990～1995年	戦後50年を節目として、問われる日本人の“歴史感覚”など。あるいは、バブル経済を境にして、「没落」に関する議論が散見された。
1996～1999年	日本のシステム、制度そのものにかかわる劣化、披露について、特に1997年の相次ぐ企業倒産などで、バブル経済崩壊に続き、経済にかかわるものがみられた。また技術力、人材、品質の劣化が取り上げられ、国際的な競争力の低下としても問題視された。
2000～2005年	すでに90年代から散発的な議論はあったが、学力崩壊、学力低下、学力格差などが問われた。さらには、人口減少と少子化の問題は、日本の没落問題と絡めて論じられた。 また子育て問題が顕在化し、育児放棄、幼児・児童虐待といったものが取り上げられ始めた。そして「キレる子ども」や“子どもが壊れる”といった問題状況が報告された。
2006～2007年	首相の辞任や政治的な混乱が続き、政治あるいは政治家の劣化が叫ばれた。描けぬ国家的な戦略、（引用者注：原文では「。」だが誤記と見られるので修正した）ホワイトカラーと中間層の崩壊、ジャーナリズム、国家、医療システムの制度疲労などが取り上げられることが多くなった。
2008～2009年	「残念ながら、もはや日本は『経済は一流』と呼ばれるような状況ではなくなってしまった」（2008年1月18日、通常国会の経済演説で大田弘子・経済財政担当大臣の発言）によって、その反響が多数みられた。また、2007年以前のものを再び取り上げるもの（も――引用者補足）多数あった。

表1-2 『週刊朝日』連載企画「徹底考察 日本人の劣化」記事タイトル（是永ほか[2011]p.8を参考に作成）

回	号	タイトル	執筆者
第1回	2001/8/31	ことば　「無意識にアメリカ人になりたがる危険」	井上ひさし
第2回	2001/9/7	家族　「親」を演じる僕らを「ニセ物」と子が見抜く	重松清
第3回	2001/9/14	脳　壊れない機械を使うと、人間が壊れる	養老孟司
第4回	2001/10/12	官僚　特殊法人は戦前の陸軍。中枢が崩壊している	猪瀬直樹
第5回	2001/10/26	検察・警察　自分たちは正義だと確信し、思い上がり、油断が生まれた	魚住昭
第6回	2001/11/2	大企業　「ダットサン」を日産は捨てた…愚挙でした	片山豊
第7回	2001/11/9	学力　残念ながら、今の日本に考える世代は存在しません	細野真宏
第8回	2001/11/23	マナー　個室が街に広がったのです。他人の目は全く気にしない	三浦展
第9回	2001/11/30	IT社会　一人ひとりが武器を持った。倫理的に荒廃する危険がある	西垣通
第10回	2001/12/7	男　男らしさを持った女性が増え、優しい男たちはパーツとなる	香山リカ
第11回	2001/12/28	サルと比較して…　アイちゃんは子育てを勉強した。人間の母親のモデルですね	河合雅雄

格差』（岩波書店、１９９８年）や、佐藤俊樹『不平等社会日本』（中公新書、２０００年）などといった、我が国の「階層化」を指摘する書籍は、それまで「一億総中流」などと言われていた我が国の社会が揺らいでいるという言説を引き起こした（この周辺における論争については、『中央公論』編集部・編『論争・中流崩壊』（中公新書ラクレ、２００１年）に詳しい）。その中でも、山田昌弘の『パラサイト・シングルの時代』（ちくま新書、１９９９年）を中心に、「自立しない」若い世代が社会を蝕むという言説が展開され、ここでも若年層バッシングが展開された。山田に対抗する論陣を張るものとして、玄田有史の『仕事のなかの曖昧な不安』（中央公論新社、２００１年／中公文庫、２００５年）や、宮本みち子『若者が《社会的弱者》に転落する』（洋泉社新書ｙ、２００２年）などが展開されたが、玄田については２００４年に「ニート」概念を紹介する過程で、やはり若い世代を今までとは違った心性を持った存在として描くことにより若年層の労働問題を上の世代に「理解」させようとする立場を取り、若い世代へのバッシングを呼び起こした。

若い世代の「劣化」と「階層化」をめぐるポリティクスは、「若者の右傾化」論として噴出した。２０００年代より、一部の「左派」系の言説に親和的な論客より、若い世代の「右傾化」が指摘されるようになった。このような流れは、２００２年において日本及び韓国で開催されたサッカーワールドカップにおいて、主に若い世代のサポーターが「ニッポン」を連呼することや、齋藤孝の『声を出して読みたい日本語』（草思社、２００１年）に代表されるような「日本語ブーム」などといった、それまで浅田彰や大塚英志などにおいて指摘されていた「Ｊ回帰」が本格化したことを発展させて、若い世代において新たな「ぷちナショナリズム」が広がっており、それが政治的な悪影響を及ぼすかもしれない、と指摘した香山リカの『ぷちナショナリズム症候群』（中公新書ラクレ、２００２年）を起点としている。

現代の「若者の右傾化」論には、『ぷちナショナリズム症候群』における香山の主張に代表されるような、階層化によって「底辺」へ追いやられた若年層が国家という「大きなもの」にすがることによって「右傾化」が生じるのだ、とする言説が多く見られる。例えば安田浩一の『ネットと愛国』（講談社、２０１２年）の第９章においては、若い世代が「在日特権を許さない市民の会」（在特会）などの排外主義的組織に加わる理由として、それらの組織が《疑似家族の雰囲気が漂う》（安田浩一［２０１２］p. ３２０）ものであるとし、《社会への憤りを抱えた者。不平等に怒る者。劣等感に苦しむ者。

仲間を欲している者。逃げ場所を求める者。帰る場所が見つからない者》（安田、前掲ｐ．３５５）に対してある種の「居場所」を提供するものであると結論づけられている。この見方に対しては近年では批判もあるが（本章第５節参照）、少なくともこのような「ケア」的な視座が、特に「若者の右傾化」論において保持されてきたのは事実であろう。

それどころか、以前は安田が生暖かいまなざしを向けるような「居場所を失った若者」あるいは「貧困化した若者」は、明確に憎悪の対象であった。例えば荷宮和子は、２００３年に刊行した『声に出して読めないネット掲示板』（中公新書ラクレ、２００３年）や、２００４年に長崎県佐世保市で起こった小学生による同級生殺傷事件においてインターネットの現状について述べた『月刊現代』２００４年８月号の記事などで、インターネット上において反「左翼」的な言動を展開する者に対して《在日ではなく、女ではなく、低学歴ではないものの、しかし、低所得な人間》（荷宮和子「２００４」ｐ．１７１）であると述べているが、荷宮がそのように規定した層に対して投げかける視線は次のようなものだ。

> 昨今のきな臭い空気に、賛同の意をしめしている人たちは少なくない。その種の意見を見かけるたびに、「戦争になったら強姦し放題だぜ！」という彼らの声なき声が私には聞こえてくる。（略）が、だからこそ、こんな状況の中で「月刊現化」をわざわざ読んでいる、といった人たちには、「無教養な田舎者」が戦場に送られたときに何をしでかすかについての自覚と覚悟を、抱いておいて欲しいと思うのである。（荷宮、前掲ｐ．１７４）

また三浦展は、郊外化の「病理」について論じた『ファスト風土化する日本』（洋泉社新書ｙ、２００４年）で、特に若い世代の消費行動に悪影響が出ているとしており、その中に「右傾化」も含まれているとする。しかし三浦の視線も、「愛国的」な行動に走る若い世代を「自分が反対している病的なもの」から生まれた「鬼子」として排除するものでしかない。

かつてのナショナリズムは、地域共同体を基礎とした愛郷心を国家がまとめあげることによって成立した。しかし、いまは愛郷心の基礎となる地域共同体が崩れている。それを「保守派」は危ぶむ。そこで、具体的な土地や場所への愛着とは無縁の抽象的なナショナリズムが鼓舞される。オリンピックやサッカーワールドカップなどを契機として、マスメディアを通じて盛り上げられる。それはいわば、メディア・ナショナリズムであり、バーチャルなナショナリズムだ。

「庭園の島」も、そうしたバーチャルなナショナリズムに利用されまいかと心配になる。たかがロードサイドのファミリーレストランで食事をするだけの郊外型消費生活を田園都市のイメージで語ってきたこれまでの国土行政のお粗末な実績から評価させてもらえば、五全総が理想どおりに実現し、日本が「庭園の島」になるなどと信じる気にはとても私はなれない。いくら庭園都市でも、そこにあるのがファストフード店とコンビニと巨大ショッピングセンターだとすれば、それは矛盾だ。それはしょせん「ファスト庭園都市」にすぎないであろう。

過去三〇年間、日本中で、黄金色に輝く稲穂が風になびく水田が潰されて不要な道路と無機的で非歴史的なニュータウンができ、豊かな森が根こそぎにされてゴルフ場になり、郊外化によって歴史ある街並みが崩壊しつづけた。国土全体がスクラップ＆ビルドされたのだ。そして、それはみな、「所得倍増」や「富国強兵」の名においてではなく、「ふるさと」や「田園」や「地方の時代」の名において進められてきたのだ。いかに素晴らしい目標も、現実の経済原理によって別の姿に変わる。それがこれまでの歴史だ。政治家たちは、右手で地域固有の風土と歴史ある街並みを破壊しながら、左手で愛国心の旗を振るのだ！（三浦展「２００４」ｐｐ．１３１-１３２）

１．２ ２００５年衆院選の「若者論」

このような「階層化し、右傾化した〈若者〉」に対する脅威論が吹き上がったのが、２００５年における衆議院議員総選挙（２００５年９月１１日）であった。

表1-3 年代別に見た劣化している分野（複数回答、是永論ほか[2011]p.39）

	政治	経済・産業	労働・勤労	医療・介護・福祉	教育・しつけ	芸術・文化	スポーツ	メディア・ジャーナリズム	モラル・道徳	暮らし	N
29歳以下	98 67.6%	81 55.9%	76 52.4%	41 28.3%	113 77.9%	13 9.0%	12 8.3%	42 29.0%	110 75.9%	38 26.2%	145
30～39歳	110 65.1%	95 56.2%	90 53.3%	41 24.3%	144 85.2%	23 13.6%	8 4.7%	49 29.0%	145 85.8%	57 33.7%	169
40～49歳	93 63.3%	80 54.4%	78 53.1%	39 26.5%	126 85.7%	11 7.5%	12 8.2%	38 25.9%	120 81.6%	46 31.3%	147
50～59歳	129 67.5%	95 49.7%	96 50.3%	43 22.5%	166 86.9%	14 7.3%	14 7.3%	57 29.8%	171 89.5%	56 29.3%	191
60～69歳	120 76.4%	80 51.0%	81 51.6%	54 34.4%	138 87.9%	14 8.9%	11 7.0%	58 36.9%	131 83.4%	41 26.1%	157
70歳以上	92 79.3%	62 53.4%	61 52.6%	39 33.6%	109 94.0%	12 10.3%	10 8.6%	39 33.6%	96 82.8%	37 31.9%	116
合計	642 69.4%	493 53.3%	482 52.1%	257 27.8%	796 86.1%	87 9.4%	67 7.2%	283 30.6%	773 83.6%	275 29.7%	925

当該の選挙は、当時の首相であった小泉純一郎が「郵政民営化の是非」を問うて議会の解散を行い、自らの意向に反する議員に対しては「刺客」を送るなどして、「小泉」対「反小泉」を演出した選挙であった。そして結果として小泉が率いる自由民主党が２９６議席と圧勝し、野党民主党は６４議席減となる１１３議席、また小泉に離反して自民党を離党した議員を中心に構成される国民新党、新党日本はそれぞれ４議席、１議席と振るわなかった（http://www.yomiuri.co.jp/election2005/news/20050911i103.htm）。

この選挙に際して、いくつかのメディアや論客が、「小泉の戦術に乗せられた若い世代が、自民党が自らを苦境に追い込むとも知らずに投票した」という「分析」を行った。最も顕著であったのが東京新聞で、２００５年９月１３日と１７日の「こちら特報部」欄における特集であった。同欄は、前者においては千石保と矢幡洋、後者では尾木直樹をコメントとして起用し、「自民党を支持する若者」を病理として分析する記事を書いた。１３日の記事から引用してみよう。

（筆者注・矢幡曰く）「個人が何か強い決断をするというドラマを好むようになった。特に今の二十代は、いじめ問題をくぐり抜けてきた世代で、目立てばいじめられるため角が立つことに対する恐怖感がある一方で、強い者の決断を、内容を問わずにリスペクト（尊敬）する。つまり思考放棄だ」

日本青少年研究所の千石保所長は「改革を止めるなっていうキャッチフレーズは若者言葉。元気がいい。ただし中身は問われていない。まさに流行だしファッションなんだが、ある意味小泉首相自身が若者化していると思う」との見方を示す。

（略。民主党に支持が集まらなかったことについて、千石曰く）「本来ならば外国との関係はどうするのかや、財政問題はどうかといった、いろんなことを考えた上で投票すべきだが、そんな余計なことを持ち出したってスパッと割り切れないから面白くないと排除されるだけ。民主党がテーマにした年金問題は確かに大事な問題だが、若者向けの言葉になじまなかった」

また金子勝は、２００５年９月２８日付の朝日新聞「論壇時評」欄で、若い世代における「下流化」を論じた（その内容はほとんどバッシングであった）『下流社会』（光文社新書、２００５年）に触れ、次のように若い世代の「閉鎖性」を問題視した。

階層意識が「下」ほど「男女とも一人暮らし」が多く、「あくまでも自分らしく生きたい」と思い、結婚もせず子どもも生まない。またパソコン、携帯電話、テレビゲームを持ち、「しばしば非活動的で、ひとりでいることを好む」。現在の生活を楽しもうとする、この若者たちの心象風景には、社会どころか家族さえ見えてこない。そしてデータは、「下」ほど・支持政党なしが減り自民支持が増えることを示している。（金子勝［２００５］）

菅原琢が指摘するように、この選挙において若い世代の投票率が顕著に増大したことは疑いない（菅原琢［２００９］p．３３）。だがそれは「無知な若年層が

小泉のメディア戦術に踊らされて自民党に投票した」というストーリーではなく、それまで民主党が受け皿となっていた都市部の若年・中年の「改革」志向の層が自民党に流れたというものであるとされる（菅原、前掲ｐ．４１）。都市部の若い世代における「改革」志向の傾向は２００１年の参院選や２００３年の衆院選においても見られたものの、《郵政民営化をめぐる解散劇によって争点が明確化した》（菅原、前掲ｐ．４５）ことによって動員に繋がったとされている。

しかし当該衆院選における自民党の「大勝」の影響として若い世代による効果が少なからずあったことが事実であったとしても、ここまで見たような東京新聞や金子のような若い世代に対する見方は多くの問題を孕んでいる。東京新聞の記事においては、矢幡の言う「いじめ問題」と「思考停止」の間の関連性は不明瞭である。また金子にしても、「パソコン」「携帯電話」「テレビゲーム」といった、上の世代にとっては馴染みの低いものが、自民党の大勝という、金子が若い世代の「病理」の表出として見なすものの原因として槍玉に挙げるのもまた、金子における異なる世代、文化に対する偏見の表出でしかない。

また、これは前節において見てきた荷宮和子や三浦展にも共通して言えることだが、彼らの「若者の右傾化」論は、自分たちにおいて世代的に共有されているとされる生育歴、ライフコースが、自民党ないし「右傾化」への反発という「正常」な判断の根本となっているという視点を暗に含んでいる。そもそもこれらの「若者の右傾化」論においては、若い世代の「病理」と同様に、自分たちが、自らが「正常」な判断をしたとされる根拠もまた、曖昧なイメージで語られる。彼らにおける「理想とする日本人」としての「反・自民」「反・右傾化」の姿は、若い世代というものを批判することによってのみ形成されているのだ。

なおこのような「無知な若者がメディア戦略に乗せられて自民党に投票した」というイメージは、菅原琢によれば、当時の自民党が広告代理店に対して提案したとされる、「Ｂ層」（「ＩＱ」が低く、「改革」に賛成している層で、小泉のキャラクター性を中心に支持している）に対して動員することによって勝利したのだという「神話」を流布させることについては成功したという（菅原、前掲ｐ．４４）。皮肉なことに、「若者の右傾化」を問題視した層は、彼らが反発しているはずの自民党の「世論」観に相乗りしてしまったということになる。

8

少なくとも２０００年代半ば頃までの「若者の右傾化」論は、このように「階層化した若者の右傾化」を、むしろ憎悪するものが主流であった。前出の安田浩一のようにそのような「右傾化」に対してはある種の自尊心に対するケアが必要だとする視点の登場は、２０００年代後半における「ニート」論への反論や「反貧困」活動、種々の労働運動などによって若い世代の困窮が報じられるようになったこと、また若者文化論の場において、速水健朗の『ケータイ小説的。』（原書房、２００８年）のように、都市部の「オタク」層の「生きづらさ」から「郊外」へ視点が変わり（ただし、ここにおける「郊外」論への転換は、前出の三浦展の差別的な議論を底にしていることは指摘しておかなければならない。詳しくは、後藤和智［２０１４］参照）、「これまで「病理」として蔑まれてきた「地方の若者（文化）」にこそ現代を読み解く鍵があるのだ」という方向に転換したことで弱まっていったと見られる。

１．３「若者の右傾化」論を受け入れる「ロスジェネ」論客

もう一つ付け加えておくと、若い世代の論客もまた、「階層化によってはじき飛ばされた若い世代が「右傾化」によって既存の社会構造を憎悪している」という、まさに「若者の右傾化」論において若い世代を憎悪するときに用いられるストーリーを積極的に受け入れていったという側面がある。代表的な論客として赤木智弘が挙げられよう。赤木は自身の出世作となった「「丸山眞男」をひっぱたきたい」（『論座』２００７年1月号）や、あるいは後に刊行された著書『若者を見殺しにする国』（双風舎、２００７年／朝日文庫、２０１１年）において、フリーターとしての自らの苦境を、徹底して主観的に描いているが、その中に「若者の右傾化」を肯定する言説も見られる。赤木はマスメディアなどで語られる「貧困」言説が、「元々ものを持っていた、恵まれた世代」としてのバブル以前世代と、自分のような「社会に出る前にはしごを外された」バブル後世代が同列に語られていることに反発している。

前者が家庭を手に入れ、社会的にも自立し、人間としての尊厳をかつて十分に得たことのある人たちである一方、後者は社会人になった時点ですでにバブルが崩壊していて、最初から何も得ることができなかった人たちである。前者には少なくともチャンスはあった。後者は社会に出た時点で労働市場は狭き門になっており、チャンスそのものがなかった。それを同列に弱者であるとする見方は、私はどうも納得がいかない。（赤木智弘［２００７＝２０１１］p．２１４）

そしてこのような苦境に置かれた世代が「右傾化」するとし、赤木は（『論座』２００７年４月号に掲載された、佐高信ら既存「左派」文化人からの「反論」に対する「再反論」、「けっきょく、「自己責任」ですか」（『論座』２００７年６月号）を含めて）なぜ「左派」は自分のような「若年貧困層」「弱者男性」を救わないのか、としきりに問いかける。

しかし、経済格差という現状の背景には、まず「富裕層」が存在し、その下に富裕層によって安定した役割を与えられている「安定労働層」がいて、さらに安定労働層のために調整弁にされる「貧困労働層」が存在するという構図がある。左派はこの構図を自覚していないのか、結果として安定労働層と貧困労働層の間の格差を押し広げてしまっている。

こうした状況で、私は左派が想定する救済対象に「弱者であるはずの私」が含まれるとは決して思えない。いわば左派は「基本的な平等」をないがしろにしているのではないかとさえ感じてしまう。（赤木、前掲p．２３６）

このように「‘左派’が自分を救ってくれないこと」に赤木が拘泥する様は、既存「左派」に対して実存的なダメージを与えることはあっても、論壇プロレスに回収され、自らの世代、そしてより若い世代に対して赤木の思う結果をもたらす可能性は低いだろう。実際、赤木と同様に、「失われた世代＝ロストジェネレーション（ロスジェネ）」の立場から、主に文学的、思想的観点から既存社会や左派への揺さぶりをかけるような論客やメディアは早々と力を失っている。例えば、雑誌『ロスジェネ』は２０１０年で刊行された第４号で廃刊となり、大澤信亮や杉田俊介といった周辺の論客も、近年は文芸評論、文化評論などで活躍するものの、経済論、政策論からはほとんど撤退している。また「ロスジェネ」系の言説・運動の中心であった雨宮処凛や増山麗奈なども、２０１１年に発生した東北地方太平洋沖地震から発生した福島第一原子力発電所の事故をきっかけに「反原発」系の運動・言説に荷担する一方で、労働・経済系の言説については撤退していった。

現在の赤木にしても、主としてインターネット上で、例えば安藤至大の日本経済新聞の連載（安藤至大［２０１３］）や、あるいはツイッターの労働組合のアカウントが論ずる労働問題に対して、内容をほとんど検討しないまま「正社員」に対する特権を維持するものと決めつけてバッシングを行っている（後藤和智「【ライブ山形１０９サークルペーパー】先鋭化の果てに」http://ameblo.jp/kazutomogoto/entry-11482676635.html）。赤木の「戦争」への（躊躇しながらの）賛同や「左派」への反発はほとんどポーズとしてのものとみて差し支えないが、他方で赤木の言説においては、「若者の右傾化」論が前提としている、「脅威」としての「階層化した若者」という構図を継承していると見るのが適切であろう。実際、赤木は自らの言説が、そのような「若者の右傾化」論が想定するような「階層化した若者」の主観、ルサンチマンであるという立場を明確にしている。

私の文章は、けっして公平中立不偏不党などではありません。自分の生活や実感から生まれる文章ですから、きわめて偏っていて、客観的に見ればなんの証明にもなっていないレベルの代物です。

しかし、そうした視座は不要なものなのでしょうか？

人間が生活していく社会を論じるうえで、必要なのは学者や専門家の知識だけなのでしょうか？

科学的に装った、冷静で長期的な観点だけが重要であり、フリーターのルサンチマンなど、不要なのでしょうか？（赤木、前掲、p．１９）

もちろん、このような「主観」に基づくことが、赤木のコミュニカティブな行動からくる無理解などを正当化するものでは少しもないことは言うまでもない。